

Ⅷ 鼻に用いる薬

鼻炎用点鼻薬は、急性鼻炎、アレルギー性鼻炎又は副鼻腔炎に伴う諸症状（鼻閉（鼻づまり）、鼻汁過多、くしゃみ、頭重（頭が重い））の症状の緩和を目的として、鼻腔内に適用される外用液剤である。

急性鼻炎は、かぜの随伴症状として生じることが多く、鼻腔内に付着したウイルスや細菌が原因となって引き起こされる鼻粘膜の炎症である。アレルギー性鼻炎は、ハウスダストや花粉等のアレルゲンに対する過敏反応によって引き起こされる鼻粘膜の炎症である。副鼻腔炎は、こうした鼻粘膜の炎症が副鼻腔にも及んだもので、慢性のものは一般に「蓄膿症」と呼ばれる。

鼻炎用点鼻薬は局所に用いるものであるが、有効成分が鼻粘膜を通っている血管から吸収されて循環血液中に入りやすく、全身作用を生じることがある。また、過度に使用するとリバウンドの二次充血によりかえって鼻閉（鼻づまり）を起こすことがある。用法、用量を厳守し過度の使用は避ける必要がある。

剤型はスプレータイプで鼻腔内に噴霧するものが多いが、小児向けの商品には液剤を綿棒で塗布するタイプもある。スプレー剤を用いる際は、噴霧後に鼻汁とともに逆流する場合があるので、使用前に鼻をよくかんでおくことのほか、使用後には鼻に接した部分を清潔なティッシュペーパー等で拭き、必ずキャップを閉めた状態で保管し清潔に保っておく必要がある。また、汚染を防ぐために容器はなるべく直接鼻に触れないようにするほか、他人と点鼻薬を共有しないようにする必要がある。

1) 代表的な配合成分、主な副作用

(a) アドレナリン作動成分

交感神経を刺激して鼻粘膜を通っている血管を収縮させることにより、鼻粘膜の充血や腫れを抑え、鼻閉（鼻づまり）等を緩和する成分として、塩酸ナファゾリン、塩酸フェニレフリン、塩酸テトラヒドロゾリン等のアドレナリン作動成分が配合されている場合が多い。

循環血液中に移行すると血管収縮作用により血圧を上昇させるため、高血圧や心臓病、を悪化させる可能性がある。また、交感神経刺激により、糖尿病や緑内障、甲状腺機能亢進症を増悪させたり、その治療の妨げとなる可能性もあるので、それらの基礎疾患を有する人では、使用前に治療を行っている医師又は基礎疾患の治療薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされることが望ましい。

(b) 抗ヒスタミン成分

アレルギー性鼻炎の発生には、生体内の伝達物質であるヒスタミンが関与している。くしゃみや鼻汁等のアレルギー症状を抑える成分として、マレイン酸クロルフェニラミン、塩酸イプロヘプチン等の抗ヒスタミン成分が配合されている場合がある。

抗ヒスタミン成分の働き、副作用等に関する出題については、Ⅷ（アレルギー用薬）を参

照して作成のこと。

(c) 抗アレルギー成分

クロモグリク酸ナトリウムは、肥満細胞からヒスタミンの放出を抑制することにより、花粉、ハウスダスト（室内塵^{じん}）等によるアレルギー性鼻炎の症状を抑える。通常、抗ヒスタミン成分と同時に配合される。

医療機関において減感作療法等のアレルギーの治療を受けている人では、その妨げとなる可能性もあるので、使用前に治療を行っている医師又は治療薬の調剤を行った薬剤師に相談がなされることが望ましい。

まれに重篤な副作用として、アナフィラキシー様症状を生じることが知られている。その他の副作用として、鼻内刺激感、鼻出血、頭痛が現れることがある。また、眠気が現れることがあり、クロモグリク酸ナトリウムが配合された鼻炎用点鼻薬を使用した後は、乗物又は機械類の運転操作を避けることとされている。

なお、長期連用を避けることとされており、症状の改善がみられた場合であっても、2週間を超えて使用した場合の有効性、安全性に関する科学的データが限られていること、また、アレルギーの要因（ハウスダスト等）自体に対する改善策も図ることが重要であることから、使用の適否につき専門家に相談しながら慎重な判断がなされることが望ましい。

(d) 抗炎症成分

鼻粘膜の炎症を鎮める成分として、グリチルリチン酸二カリウムが配合されている場合がある。グリチルリチン酸二カリウムの働きに関する出題については、I－1（かぜ薬）を参照して作成のこと。

(e) 局所麻酔成分

鼻粘膜の過敏性や痛みや痒み^{かゆ}を抑えることを目的として、リドカイン、塩酸リドカイン等の局所麻酔成分が配合されている場合がある。

(f) 殺菌消毒成分

鼻粘膜を清潔に保ち、細菌による二次感染を予防することを目的として、塩化ベンゼルコニウム、塩化ベンゼトニウム、塩化セチルピリジニウム等の殺菌消毒成分が配合されている場合がある。

2) 相互作用、受診勧奨

【相互作用】 アドレナリン作動成分は、鎮咳去痰薬^{がい たん}に気管支を拡張成分として配合されているほか、外用痔疾用薬^じに止血成分として配合されていたり、点眼薬にも結膜の充血を取り除く目的で配合されている場合もある。また、抗ヒスタミン成分は、風邪薬の鼻汁止めや睡眠改善薬又は乗り物酔いの成分としても配合されている。これらの医薬品との併用により、同種の作用

を有する成分が重複し、効き目が強すぎたり、副作用が現れやすくなるおそれがある。

【受診勧奨】 一般用医薬品の鼻炎用点鼻薬の対応範囲は、急性又はアレルギー性の鼻炎及びそれに伴う副鼻腔炎であり、蓄膿症ⁱなどの慢性のものは対象となっていない。鼻炎用点鼻薬には、それらの症状を緩和する働きはあるが、その原因そのものを取り除くわけではない。また、アドレナリン作動成分のように、鼻以外の器官や臓器に影響が生じる可能性がある成分も配合されていることから、長期連用は避けることとされており、3日位使用しても症状の改善がみられない場合には、漫然と使用を継続せずに医療機関（耳鼻科）を受診ことが望ましい。

かぜ症候群等に伴う鼻炎症状の場合、鼻炎が続くことで副鼻腔炎や中耳炎などにつながることもあるため、そのような症状の徴候に対しても注意を促すとともに、中耳炎が発生した場合などは医療機関を受診するよう勧めるべきである。

鼻粘膜が腫れてポリープ（鼻茸）^{なげ}となっている場合には、一般用医薬品により対処を図ることは適当でなく、医療機関における治療（ステロイド性抗炎症成分を含む点鼻薬の処方等）が必要となる。

アレルギー性鼻炎における受診勧奨に関する出題については、Ⅶ（アレルギー用薬）を参照して作成のこと。

ⁱ 蓄膿症、慢性鼻炎等の効能を有する一般用医薬品に関する出題については、Ⅶ（アレルギー用薬）の漢方処方製剤を参照して作成のこと。